

吉野の桜 松隈義勇

— 芭蕉と西行 覚え書 —

一 様々園

長くあこがれていた吉野の花を今年こそこの目で見ようと思ひ決めた。年々歳々花は開くかもしれないが、もし私の上に無常の嵐が襲つたら、永久に見る機会はないとふと思つたのである。

旅立つた四月十六日は日曜日だったので、混雑を恐れる気持などから、吉野行きはわざとはずして、芭蕉の故郷である伊賀の上野に一泊した。一つには芭蕉に心を近づけ芭蕉を親しいものとした上で吉野を踏みたかったのである。芭蕉は貞享五年（一六八八）『笈の小文』の旅の折、故郷上野から出て吉野の花を見たが、その芭蕉の旅にならう旅程に偶然になつた。

上野では、この地で一夜を過すことと様々園の桜を見ることが眼目だった。芭蕉が「山里」とか「山家」とか呼んだこの伊賀盆地の中心の古い城下町は、夜も九時ともなればしつとりと静まりかえつてまるで永遠の眠りにはいつているかのようだった。私も芭蕉のことだけを考へて寝た。

様々園の枝垂桜はもう葉桜だった。花期の遅い吉野を主とした旅である以上しかたのないことであつた。この老樹は園内の東北の隅

にあつて四方に優美な枝を垂れて、朝風に揺られていた。

様々園は今私人の所有に属して一般に公開されていないが、ここはかつて芭蕉の仕えた蟬吟の生家藤堂家の下屋敷の跡である。芭蕉は前に書いた貞享五年、吉野へ行こうという矢先に、故主の遺児である当主の良長からこの邸に招かれた。良長も亡父に似て俳諧をたしなみ探丸と号していた。探丸の前で芭蕉は、

さまざまの事おもひ出す桜かな

と詠んだ。様々園とはこの句に因む名である。今ある桜樹は芭蕉の句によまれたのから三代目にあたるという。

芭蕉が招かれた時は桜が花盛りだったのでらう。その花の姿の、蟬吟在世當時と変りないことが、芭蕉にさまざまのことを思い起させた。喜びも悲しみも苦しみもあつた昔のあれこれである。「さまざまの事」にこもる意味は深い。

しかしこの句はその詠まれた事情からいって、詠嘆感傷の句ではなく、挨拶敬語の句でなければならぬ。言つてみれば、「御縁の深いあなたさまと、長い年月の後に再びお逢いできて、御前に伺候させていただきます、昔のままに咲き栄える桜の花をこうして目

にしておりますと、亡き御父君さまにお仕えしてございました過ぎし日の、じつにさまざまのことが思い出されることでございます。そしておなつかしさとかたじけなきに涙に暮れるばかりでございます。いと」というような意味に理解しなければなるまい。

生に刻まれている複雑な過去の思い出をかみしめながら、その昔と今をつなぐ宿縁のふしぎさに向たれると同時に、ただ今自分が受けている厚遇のかたじけなきを謝しているのである。そして、そのいっさいはあげて命あることのおかげであると思う。そうした思ひ出、宿縁感、ありがたさ——そして命の実感の契機をなすのは、繪乱と咲きさかる華麗な枝垂桜の花なのである。

ここで「命」といったのにはいささか理由がある。この句といっしょに私はいつも次の句を思い出す、

命二ツの中に生たる桜かな

これは「さまざまの」の句より三年前の『野ざらし紀行』の旅の折の吟で「水口にて二十年を経て故人に逢ふ」という前書きを伴っている。この「故人」は同郷の知人であり門弟であった服部土芳をさしている。旅を終えて帰った土芳は、芭蕉がたった今立ったと聞き、跡を慕い、滋賀県下の水口という宿場で行き逢うことができて終夜語り明かした。その時の詠だという。

長く会えなかつた二人が、つつがなき命をもって再会し得た、その命と命とが純澄無雑に照り会う喜びの場面に、桜が生き生ぎと盛りの花を開いて、二つの命をさらに輝かし栄えあらしめている、という句意で、「生きたる」は命二ツと桜の花との両方に言いかけられている。

この句の「命」が、西行の「年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山」（新古今集）の歌をふまえていることは疑う余地がない。西行の歌は、年若くして越えた小夜の中山（静岡県）を、晩年の奥羽への旅に際して思いがけずも再び越える機会に遇ったことを、命あることのおかげだとして、深く感慨を催したものであるが、この「命なりけり」の単純率直な力強さは倫を絶している。「命なりけり」という語そのものは、『古今集』の「春ごとに花のさかりはありなめどあひみん事はいのちなりけり」（読人不知）などに基づいたのもあろうが、全く西行世界のものにしてしまっていて、極めて切実である。西行の歌には命という語を用いたものが多いが、「今よりはいとほじ命あればこそかかる住居の哀をもしれ」（住みけるままに庵いとあはれに覚て・異本山家集）のような、ふと目に付いた歌の使いざまで見ても、この一語にはただならぬ重みがある。

仏道修行ひとすじに打ち込み、浮世を捨てきつた聖として生き通しながら、終生雄心と世心とを失わず、その反面で花を惜しみ月に泣く感傷に身を任せた、このいささか怪物めいた回国遍歴僧の本質を考えてみるのに、平安末から中世へかけてのあの大動乱の世を生きた抜いた武人たちが体験した命の重さ、それをこの人は最後まで失わなかつたというように、私には見える。

芭蕉は周知の通り西行から多くのものを学び吸収することを念としたが、西行の「命」という一語の重みを見逃さなかつたところに、芭蕉の非凡さがうかがわれる。だから、芭蕉が「命」という語を用いるときは、いつも西行が念頭にあつたようである。「命なりわづかの笠の下涼ミ」は小夜の中山での吟であり、『猿蓑』の歌仙

での「草庵に暫く居ては打やぶり」の芭蕉の句と、これに付けた「いのち嬉しき撰集のさた」の去来の句とはまさしく西行の例による句作りである。

さらに芭蕉には、「命」を桜の花に結び付け、桜を「命」の象徴と見ようとする傾向があったように思われる。はなやかな桜の花は芭蕉にはそう見えたのだろうし、あるいは西行があればどこに花を愛したことが契機の一つとなつてゐるのかもしれない。「さまざまの」の句のところ「命」ということを持ち出したのは、そういう理由からである。

さて芭蕉は、西行の本質をなす命の重みを自分でも体得しようとなつたと思われる。しかし時代の違い、人間的性質の違い、さらには和歌と俳諧との体質的な違いはいかんともしがたかった。その命の重さも結局は観念上だけにおわつてしまつて、「命なりけり」のすさまじい迫力を追認することはついにできなかった。彼の芸術では、命の重さがあるゆえにいよいよ無常の観念が深いという生身の深刻さは表わされず、「頓て死ぬけしきは見えす蟬の声」の句に見るように、命を透けてすぐに無常と死が見えしてしまつてゐる。これを芭蕉の限界というならそうもいえないが、しかし西行は西行、芭蕉は芭蕉で、それぞれに本性を尽しているのだ、これでいいのだろう。ただ、その芭蕉が芭蕉であるための欠くことのできない理想像が西行だったということは、まぎれもない事実である。

二 苔清水

様々園を出て、吉野へ急いだ。吉野に着いたのは一時を過ぎたころで、こんでいた。まず行く先は奥の千本のさらに奥の西行庵址と

心に決めてある。ロープウェイの終点の吉野山駅の揭示で、竹林院前から奥の千本までのバスが出てゐることを知つた。発車寸前に危うく飛び乗つたバスは、時々肝を冷やす崖ぶちをうねる奥吉野有料道路を登つて奥の千本の終点に着いた。奥の院金峰神社の参道前である。バスの人に聞くと、西行庵は神社よりさらに奥へ進むのだそうである。トコトコと歩く。それほど急な坂路でもなく、昔伝へ聞いていた昼なお暗い森々たる山路でもなかつた。こじんまりと古雅な金峰神社の社殿から右へ折れて、しばらく杉木立の中の路。そこを過ぎると、ハイキングコースじみた明るい山路になる。右手は丘、左手は谷。その谷への下り路の角に「苔清水」の標示がある。トントンと下ると、すぐそこに、岩肌を潤す清水が目にはいった。三、四メートルにも足りぬが、山滝のさまで、苔むした岩肌の、水の力に穿たれた垂直な窪みの溝を、涼々と声を立てて流れ滴つてゐる山清水である。

前に来ていた若い女性二人がコップですくつて飲んでゐる。私もこの清水の存在を期待して、咽喉をからからにして辿り着いたのである。両手にむすんで口にふくむ。水をとかしたように冷たく、癖のないうまい水で、苔の香りが微かである。甘露とはまさにこれであらう。

清水の向つて右の草むらの中に、苔のついた石を二つ重ね、下の石に「苔清水」と彫り、上に、

露とくく試に浮世すまかはや

の芭蕉の句が刻んである。『野ざらし紀行』中の句である。また清水の左手には木の札を立て、

春雨の木下につたふ清水哉

の『笈の小文』の中の句がしるしてある。

西行の行実を慕ってここまで足を運んだ芭蕉は、この昔のままの苔清水を見ていかに喜悅したことであろう。おそらくうやうやしく口にふくみもしたにちがいない。紀行の中には、

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二町計^二わけ入ほど、柴^{しば}かよふ道のみわづか(に)有て、さがしき谷をへだてたる、いとたふとし。彼とくく^くの清水はむかしにかはらずとみえて、今もとくく^くと雫落ける。

としるし、続いて「露とくく^く」の句が掲げてある。

この「露とくく^く」の句は、西行の歌と伝えられる「とくとくと落つる岩間の苔清水汲み干すほどもなき住居かな」を踏まえている。西行の行跡にならうことで、わが心の俗情を洗いすぎたいという心である。「春雨の」の句は、清水の細やかな静けさと美しさとを暗喩的に表わしたものである。

苔清水から二百メートルばかり細い路をだらだらと南へ下ると、林となり、中にちよつとした平地があつて、草庵のさまに模した小さな建物が半ば朽ちている。傍の標示板に、ここが愛染と呼ばれる地で、西行山居の跡だとなり、「とくとくと」の歌も書き添えてある。この歌が西行作という確証がないと同様に、この地が西行庵居の跡という確証もまたないのが事実である。ただ西行が吉野の奥にこもつたことはたしかであり、そうとすれば、地形・状況からみて、また二町ばかり上に安禅寺という大寺院がその当時あつたことから推しても、まず庵居するとすればこの辺だらうと想定されてい

るのである。芭蕉もここに来てここを西行庵居の地と信じて、低回したのである。今は訪れる人もわりあいあつて、幽邃^{ゆうすい}の雰^{ふん}囲^い気^きはややそこなわれた感じもするが、さすがに山鶯^{やまうす}の声がしきりにし、その他の小鳥の声も交じる。

さて、西行が事実ここに庵を結び、かの苔清水を汲んだかどうかは知り得ないが、それにもかかわらず、芭蕉がここをそうと信じることによって、西行から芭蕉へ伝続したものをはっきり目の前にした思ひだつた。『笈の小文』の中にある有名な一節、「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。」が浮んできた。芭蕉にとって西行とは、浮世を捨てた求道^{もとどう}一途の高士であり、同時に造化に随つて四時を友とした風雅の道の先達として、最高無比の理想像であつたのである。

三 吉野の桜

帰りはバスを止めて歩いた。金峰神社から下の方の道の左手がいわゆる奥の千本だが、さほど目を驚かす花の山とも見えなかつた。ただ道の傍のそこに老木の桜が花をつけて、深山の桜らしい風情を見せている。やがて躑躅^{つとむ}が城跡を過ぎ、水分神社。山深く鎮座して、三種造りの古雅なたたずまいの社殿の前庭に、中ぐらいの大さきの枝垂桜がいっぱいの花をつけて咲き盛っていた。

少し行くと世尊寺跡という標識の出ている横に眺望絶佳と添え書きしてあるので、試みにその展望台に立つてみた。と、たちまち眼下に眺望が開けた。上の千本から中の千本へかけての桜が、山腹や

谷間をうす赤く彩ってつづいていた。金剛・葛城・龍門の峯々が遙かの空際に霞み、やや近くの小高い一角には蔵王堂の屋根が浮んでいる……。

さらに下って花矢倉。源義経の忠臣佐藤忠信奮戦の所と伝えられる。ここで見ると、世尊寺跡から僅か下ったばかりなのに、際立って眺望が増した。近景、中影、遠景のすべての花の景色が備わるのだ。私はウッと息をのんで、我を忘れ、陶然と花の交響楽の妙世界に溺れ込んだ。

そこから始まる九十九折、右も左も前も後ろも、ただ桜、桜、桜、とりわけ右手に見上げる斜面は、花で蔽われ、滝がかかっているように見えるので、滝桜の称があるといわれるとか。思い合されるのは謡曲『吉野静』にある「み吉野の霞のうちの花の滝」の文句である。この辺りに宴を開いている人々も見かける。たらずんだり歩いたり上を仰いだり左右を見回したり、私はひたすら美を貧り花に酔った。

思うに、吉野の桜は山桜の一種である。白山桜と物の本にはある。近時日本中の至る所に見られる染井吉野とは全く異なる品種である。染井吉野は吉野の名が付けられているが、近世末期になって江戸の染井の地に住んだ植木屋が人工的に造り出した新品種だそうである。吉野の山桜とは関係がない。大枝が横に伸び広がり、葉の出るより前に万葉の花が繚乱と一時に咲き溢れる完全斉整の趣は近代人の嗜好にぴったりで、忽ちに普及して桜の王者とめられるにいたった。確かに見た目にはしごく綺麗であるが、しかしこれは造花に似た人工的な美で、ありったけを余す所なくあらわしきって、含蓄の浅いうらみがある。

私は山桜の孤高の美しさを年齢の進むと共に愛するようになった。山桜は、枝を連ねることの多々ますます弁ずる染井吉野と違って、どちらかといえば個々にその美を完成している。枝も横に広がるものが少なく、山間の木の性をむき出しに上に伸びる。赤みを帯びた葉が花と共に出る。花は淡白でしつとりと潤いがある。深い山などでは一株が黒っぽい常盤木にまじりこんでいて、寂しく幽かな美しさをそっとにじませる。総じてその美しさは、淡白で幽寂で高貴なのだが、それでいてふしぎと艶麗な風情もある。清艶とでもいったらいいか。それとも妖艶か、——この世ならぬ、うす気味わるいほどの神秘さ、鬼気妖気さえもひそませているのである。

吉野の花は、この孤高、幽艶、妖幻の美を自ら完成する白山桜の連りである。一本一本がそれぞれに孤絶の美を発揮しながら、同時にまた互いに映発しあって、大いなる美を現成してくる。だからこの山の花の美は底が深いのだ。

花に酔って徘徊するうち、花の美しさについての思念だけが心にあった。その一つ、ふと思ったのが、吉野の桜を背景にくりひろげられる『道行初音旅』——『義経千本桜』の一齣——の舞台である。これは憂いに閉される舞姫たる麗姿の静御前と、亡き母狐を慕う子狐の化身たる佐藤忠信とが吉野の花の中で踊り連れる絢爛たる場面だが、幽婉の美女と化性の物とを幻想させる何かがこの桜にはあると思う。この場面を構成した芸術家の審美感に実に見事というほかはない。

だが思えば、日本の芸術というものは多かれ少なかれこの山桜の美と通いあう要素を持っているようだ。絵でも建造物でも音楽でも文芸でも。ことに和歌、なかならず『新古今集』の幽玄美・妖艶美

は全く白山桜の美そのものである。

西行は『新古今集』の代表的大歌人だが、彼の場合は桜の美などというなまやさしい段ではない。彼にとつて桜は、美の素材でもなければ、美そのものでさえない。彼にとつて桜は、愛そのもの、「命」そのものであった。ずっしりと重い「命」の全重量を投げ懸けた、すさまじいばかりの愛執であった。彼の桜に関する歌は彼の総歌数の十七・八パーセントにも及び、そのうちの大半が吉野山の桜を詠んだもので占められている。

吉野山雲をはかりに尋ね入りて心にかけてし花を見るかな

(山家集)

あくがるる心はさても山桜ちりなん後や身にかへるべき

(山家集)

桜に対する異常なまでの愛執をなまのまま投げ出してゐる。

もろともに我をも具して散りね花うき世をいとふ心ある身ぞ

(山家集)

散る時は私を連れて逝ってくれと花に呼びかけている歌で、「うき世をいとふ心ある身」などといっているが、これは無常を諦めた仏道者の心境などといったものではない。やけくそな花への執着ぶりを表わしている。ただ西行の場合、この愛執も仏道と背馳するものでは必ずしもなかつたらう。というのは桜は古来真言密教の道場たる吉野山の中心本尊仏蔵王大権現の神木と崇められた花木であるし、真言の教理では人間の愛というものは必ずしも否定されなかつたからである。だから桜は西行には仏菩薩にも等しかつたのだらう。

さて、花の季節を選んで再び吉野に登った芭蕉の、その時の花の句は次の五つである。

(1) 桜がりきどくや日々に五里六里(笈の小文)

(2) 日は花に暮てさびしやあすならふ(〃)

(3) 扇にて酒くむかげやちる桜(〃)

(4) 花ざかり山は日ごろのあさぼらけ(芭蕉庵小文庫)

(5) しばらくは花の上なる月夜かな(初蟬)

吉野の花の美しさを奥深くつかんでいるのはさすがだが、よく見ると、花を、あるいは花への愛を、真正面から即時的に描いたものは一つもない。(1)は風狂ぶりを描いたもの。(2)は対照的な寂しい物を詠み、(4)は日常的な景を意外だとすることで驚嘆すべき絶景を裏にはのめかしている。(5)は花月の景だが、月に焦点をあて、しかもその佳景の須臾を嘆く。(3)だけがまともだが、取り合せた人事的光景が能の型を演じているということで虚事になっている。すべてが桜という実を虚化しているのであるし、また逆説的表現になっているともいえるであらう。

こういふ表現というものが俳諧の特徴であり、ひいては芭蕉の芸術の本態でもある。これは、実を実のままひたすらうたいあげる西

行の態度とは根本的に違っているのであって、さすがの芭蕉も、吉野の花にむかつては西行の「命」を追体験することはできなかったのであろう。『笈の小文』では「われいはん言葉もなくしていたづらに口をとぢたるいと口をし」といつて筆を投じている。西行と芭蕉とのことについては、汲み尽せぬ問題があるのだが……。

【考】考え下りの路を辿るうち、上の千本も過ぎ、勝手神社から蔵王堂のあたりにさしかかったころには、日も傾いてきた。中の千本あたりのやや盛りを過ぎた花が夕影を帯び、はらはらと散る花が白さを増した。

この同じ年同じ月の末日の朝日新聞に、歌人前川佐美雄氏の「花の醍醐味」と題する随筆が載った。同氏は私の行った日から四日前の十三日に、上の千本、水分神社付近を訪れて景観をほしきままにした由である。同氏が朝と夕との景を見たということを除けば、大體私の目にしたところと同じようである。

前川氏の随筆の末尾がいたく私を打った。

——ある日あるとき、にわかには谷風が吹き、花を虚空に舞いあげる、ために天日くらむほど。その花が竜巻のように吹きおろしてくる。すでに全山花はない。これを吉野の花の醍醐味（たごち）というが、それにあえるのはいつであらうか。

この一節は私を恍惚とさせた。

たしかに桜というものは一時に散るものだ。ことに吉野の桜ときたらきつと全部がいつべんに散るにちがいない。

その一時が来たら、微紅をおびたおびたらしい白雪片が空中に浮き漂い、天日を暗ませ、忽ちにして竜巻のように降るのだらう。

何という美！ 何という神秘！ 何という妖しさ！

その花の秘儀は、これを目にした瞬間が命終（いのちのしりぞ）に結びつきそうなの、身の毛のよだつ思いがある。その日にあいたくもあるが、しかしおそろしい。

〔付記〕

伊賀上野の様々園は非公開であるのに入園できたのは、芭蕉翁記念館長桃井康隆氏の懇切なお口添えの賜である。同館長には宿のことから何からすべてお世話になった。

なお服部土芳の墓は、上野市立図書館長山本茂貴氏の丹念な探索の結果先年発見された。桃井氏の御紹介でその当の山本氏にお会いできた上に、山本氏のご厚意によって車でその墓のある郊外の西蓮寺まで行きご案内いただいた。

両館長に心からの謝意を表する。